


## 旅行報告書

総合地球環境学研究所長 殿

2017年 8月 14日

( 所 属 ) 香川大学教育学部  
 ( 職 名 ) 教授  
 ( 氏 名 ) 村山 聡

印

このたび出張しましたので、下記のとおり報告します。

出張期間	平成29年8月8日(火)～10日(木)
用務先	総合地球環境学研究所 セミナー室1・2
用務	村山FS第一回全体会議に出席
	<p>8月8日火曜日：13:00-17:00 (地球研 セミナー室1・2)        13:00-13:30: はじめに--全体会議の趣旨について-- (村山聡)        13:30-14:15: 渡辺和之「バングラデシュの犠牲祭と家畜交易」        14:15-15:00: 青木聡子「記憶と語りからとらえる環境」        (休憩：15:00-15:15)        15:15-16:00: 瀬戸口明久「自然と文明の間：梅棹忠夫の生態学的文明論」        16:00-16:45: 和田崇之「京北地方における納豆発酵菌の環境分離および遺伝子解析の試み」        16:45-17:00: 本日のまとめ</p> <p>今回の全体会議の趣旨は、外部評価に耐える研究プロジェクトとするために、1. 最終目標の明確化、また、2. 研究プロジェクトの骨子であるLiving Spacesに関する理解の合意形成、3. 物語や語りであるナラティブに関する共通理解や注意点の明確化とアクションリサーチのあり方、4. 環境史研究を基盤とする研究プロジェクトとして、研究基盤となる環境史研究に関するこれまでの議論と将来像を明らかにすること、5. どのような地域研究を数理地理モデリングと組み合わせた研究成果の報告として、またその研究成果に基づき、いかに研究プロジェクトの目標と方向性そして具体的な方法と内容をいかに端的に説明するかにある。</p> <p>初日の議論では、渡辺氏によって犠牲祭と家畜交易の検討を通して、バングラデシュとネパール境界線の比較地域研究のあり方について検討された。地方史研究を基盤としつつもLiving Spacesという概念を通して多層的な地域研究のあり方を考える良い機会となった。</p> <p>青木聡子氏によって環境社会学におけるナラティブ理解と解釈についてのこれまで行われていたナラティブアプローチの整理の後、環境運動研究における記憶と語りや検討され、闘争を通して他者の合理性を理解すること、語りや記憶の多層性、あるいは、遠い記憶としての歴史が運動の基盤にもなりうるということが紹介された。ナラティブをLiving Spacesに関してどのように扱っていくかに関して有効な幾つかのフレームが提供された。</p> <p>瀬戸口氏によって、梅棹忠夫氏の『文明の生態史観』の読み込みを通して、文明の生態史観は多系的史観というよりも動的な機能の体系として見ることができ、この議論を通して、環境史は自然史に包摂されるようになるのではという一つの仮説が提示された。この議論はLiving Spacesを議論にする上で、貴重な提案である。</p> <p>このセッションの最後の和田氏の報告においては、日本における納豆の発祥地の一つである京・洛北研究からの依頼で、稲藁に関する遺伝子解析を試行的な経過と成果に関する報告がなされ、このような遺伝子解析という理系分野と文系的な地域研究の連結可能性が示された。Living Spacesには当然、微生物の存在も考慮される必要があり、より一層、Living Spacesという中心概念の明確化が求められると同時に、生物多様性の持続を考える上でも、微細な生物からのアプローチが有効であることを確認できた。</p>

8月9日水曜日：9:00-12:15 (地球研 セミナー室1・2)

9:05-9:50: 中島満大「歴史人口学における死亡クライシスの限界と可能性」

9:50-10:35: 竹本太郎「統治初期台湾における玉山の登頂と阿里山の発見」

(休憩: 10:35-45)

10:45-11:30: 橋健一「ネパール先住民チェパンの経済空間の歴史—恐怖と愛から分断へ—」

11:30-12:15: 浅田晴久「インド・アッサム州の生態環境と多民族社会の構造」

二日目の午前のセッションでは、最初に中島氏が歴史人口学の立場から、現在の長崎県長崎市野母町、野母村の宗門改帳の分析に基づき、江戸期においてはむしろ例外的とも言える人口増加地域における死亡危機に関する議論を通して、これまで災害史と歴史人口学との連携が不十分であった点を克服するために、コレラ、疱瘡、海難事故などの死亡危機に着目する必要性が説かれた。しかし他方で、Living Spacesを考えていく本研究プロジェクトがミクロデモグラフィとどのように関係していくのか、明確な視点が必要なことが明らかになった。

竹本氏の報告では、日本の統治初期の台湾を対象に、本多静六、矢野龍谷、齋藤音作らの日本の高級官僚・科学技術官僚などの言説を通して、玉山登頂習いにび阿里山森林の発見そして彼らと現地住民との関係が明らかになった。Living Spacesは定住人口やその場の植生だけを考えることはできない。複数のLiving Spaceが錯綜する実態の理解が肝要であることも明らかになった。

橋氏の報告では、少数民族、部族などが複雑に、あるいは、分離して居住する他民族社会の研究においてフィールドワークの大切さを改めて実感させる内容であった。また、他方で様々な空間理解の枠組みを問い直すことをできるのもフィールドワークの強みである。より生態的な環境を密接性を先住民族の生きる場では多様に変容するナラティブが醸成される。さらに、国家規模あるいは国際援助に基づく開発は重要な影響を有していることが明らかにされ、今後、現地におけるアクションリサーチの可能性にも気付かされた。

最後の浅田氏は、これまでの研究成果を短時間で紹介され、自然環境を基盤とする生業活動と技術、民族による自然利用・自然認識の違い、そして、自然利用への社会・経済・文化的要素の影響という三つの論点にまとめられた。地理学的アプローチはLiving Spacesプロジェクトの根幹にあることが明らかとなった。同時に、その地域の空間のダイナミズムは、「ブラマプトラ川氾濫源という特殊な自然環境が歴史・社会・文化など幾重にも積み重なって多民族社会が形成されている点」がアッサム州の特徴として抽出された。さらにこの方法を広域の比較史研究の中に組み込み、全ての個別地域研究を貫徹できるような作業仮説を端的に提示する必要性も明らかとなった。

8月9日水曜日：13:00-17:00 (地球研 セミナー室1・2) 「Living Spaces Projectの課題」

13:15-13:30: Narratives, theories and mathematical-geographical modelling: Satoshi Murayama

13:30-14:15: バングラデシュ・インド・ネパール (BIN) 研究

1. 寺尾徹「インド亜大陸北東部、Ganges-Brahmaputra-Mehna流域における集住パターン」

2. 藤原直哉「数理地理モデリングと地理空間データ解析」

3. 溝口常俊「国際河川の歴史地理」

14:15-15:00: 京・洛北研究

1. 東昇「山と川の資源管理—洛北・雲ヶ畑」

2. 中村博子「『漁場古書類写』に見る「漁業権」に関する理解—岡山県日生漁協に保管されている漁業関係文書を中心に」

3. 中村治「肥料の問題」

ディスカッション: 杉原薫・中塚武 (地球研)

二日目の午後のセッションでは、三日目の研究発表をも可能な範囲で組み込み、本研究プロジェクトが追求する地球環境問題そしてその到達目標の明確化を目指し、一般論的報告を村山が行い、京・洛北研究とバングラデシュ・インド・ネパール研究 (以下、BIN研究と省略) の二つの地域研究の成果、今後の課題、さらに外侮評価委員会で十分にフルリサーチへの準備がなされているとの評価を受けるための論点整理ならびに課題整理を行った。

BIN研究では、国際河川の歴史地理学的方法に気象学的研究ならびに数理地理モデリングさらにはアクションリサーチを組み合わせた実績と今後の豊かな可能性が提示された。バングラデシュの非営利団体グラム・バングラの20数年にも及ぶアクションリサーチ、さらに、名古屋大学、香川大学との連携による水研究なども10数年の実績がある。Living Spacesプロジェクトとしての代表的な研究内容の提示になりうる。

京・洛北研究も中村氏による数十年の研究成果、さらに近世近代日本の地誌研究を研究基盤としている本研究プロジェクトではあるが、日本以外のアクションリサーチや上記のBIN研究なども包摂するような論点の提示が期待された。とりわけ京・洛北研究は、中心都市京都の経済的かつ文化的な拠点としての空間条件を実証するには格好の研究対象である。ここでは屎尿処理の問題ならびにみだりにその裡に入出入りするが禁じられた御所への御用達つまり禁裏御用が問題にされた。つまり都市は集中する人口と共に京都のように文化的な中心地となるような空間機能を有していたのである。

ディスカッションにおいては、まず杉原氏から、プログラム1の概要と村山FSの位置付けならびに2017年度の活動が報告され、また、村山FSに関して、Living Spaces (空間をどう生かすか) をキーワードにした学際的・超学際的研究であり、発想の基礎には歴史地理学があると端的にまとめられた。単なる人間圏のナラティブではなく、人間と自然の関係についてのナラティブの役割についての研究であり、ナラティブと歴史・現状分析を組み合わせて、transformation to sustainabilityというプログラム1の課題に貢献しようとするものであると端的に定義づけして頂いた。Living Spacesに関連する従来の概念としては、「民族・宗教」による分類・関係、「行政単位」(村など)による分類・関係、そして生態系による特徴づけがLiving Spacesに最もつながりのある概念群であると理解された。他方で、「個人・家族」もその基礎ではあるが、ミクロデモグラフィの射程とは異なると考えられる。(1) 今後の検討課題の一つとして、研究蓄積の大きいミクロデモグラフィとの連動などをどのように理解するか、明確にする必要があることが明らかとなった。この点、数理地理モデリングや近世近代地誌資料などに基づく数理地理分析であるクラスタリングなどとの関係もより明確にする必要がある。来年3月に予定されている関西人口学会においても一部の研究成果を報告する予定であるが、この点も端的に理解されるようにしておく必要がある。ま

用務内容(研修等の場合: 日程表添付のこと)

た、経済発展の複線的経路に関する議論において、Living Spacesは経路依存性を持ちながら変化し、さらに外部との関係においても変化するが、内的に変化する。境界も変わるし、アクターも変わる。Spaceは閉じられた空間概念ではなく、他者との接合性あるいは異種との重層性そして統合性においても、その程度が変化する。しかし、ただ単に複雑なわけではなく、ある種の役割を果たしている。その意味で、今後の検討課題として、(2) Locality, Space, Social Networksなどの動き方はそれぞれ異なり、Social Networksの議論とSpaceの議論とは乖離があるのではという指摘があった。この点、数理地理モデリングや数理地理分析、さらによりナラティブな数理地理アプローチなどとの関係性も明らかにする必要があることが指摘された。また、(3) この多層的重層的かつ流動的なLiving Spacesを明確にするためにも、より固定された、あるいは、変わりにくいものなどを対立構図として明らかにしておく必要があるとの指摘もあった。この点、ブローデルの長期持続の自然や三層構造的図式における資本主義・市場・非経済の最下層の領域に関するLiving Spacesの概念からの定義づけが必要であることも明らかとなった。何れにしても個別の研究報告の成果はすでに十分な準備段階と判断できるものであり、後は取りまとめの問題であることも明確となった。

最後に中塚氏からのコメントは、評価委員会での報告のために、確実にクリアにしておく必要のある論点の整理であった。(1) Living Spacesの概念定義、これは上記の杉原氏の指摘においてかなりのまとめがなされているが、まだ検討すべき点がある。(2) BIN研究は本当に中核になるだけの準備ができているのか。(3) 日本・BIN・ヨーロッパの三者はどのような相互関係になっているのか。近世近代日本研究やヨーロッパ研究は、どのようにBIN研究に反映するのか。(4) この点との関連において、Living Spacesプロジェクトとしての明確な仮説は存在しているのか。という四点が指摘された。(1)と(2)については三日目の報告と討議で、問題点等もより明確になることが期待されると同時に、作業仮説は、このプロジェクトの目標や終着点の明確化とも関連することが明らかとなった。さらに、(5) 表題についてであるが、Living Spacesというオリジナルな概念は譲らず、場合によっては、さらに強化し、方向性を明確化し、逆に、副題で加えられているGlobal Interdependencyはむしろ削除し、Local-Areal Historyから、Living Spacesを正面から取り上げることがわかるような表題に変更する方がいいのではという提案が、最後に杉原氏からあった。

8月10日 木曜日 : 9:00-12:00 (地球研 セミナー室 1・2)

9:05-9:50: 神田さやこ 「近現代アジアにおけるエネルギー多様性社会の誕生」

9:50-10:35: 島西智輝 「近現代日本の家庭におけるエネルギー利用」

10:45-11:25: 青木高明 “Cities and roads as pattern formation on landscape” (ネット参加) 11:25-12:00: 寺尾徹 「インド亜大陸北東部の気候データ」

最初に村山から、昨日の議論を受けて、新たなプロジェクト名の提案ならびにこのセッションの最初の二報告は、来年、ボストンで開催される世界経済史会議でのLiving Spacesプロジェクトのセッション提案と関連するものであり、カウンターパートとしてはヨーロッパの「統合農民経済」グループがあり、おそらくorganic economyの議論との接点が見出されると考えられ、初期近世から近現代をカバーするLiving Spacesの独自の議論が展開できるのではと紹介した。

第1報告は神田報告であり、最初にこの報告と次の島西報告は「ユーラシアにおける「生態経済」の史的展開と発展戦略」と題された文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の研究結果の一部であることが報告された。神田報告では、19世紀インドにおいて、エネルギー制約を克服する一つの方法として形成されたのが「エネルギー多様性社会」であり、「文化的対応」もまたこの形成を支えたことが明らかにされた。この点、さらにインド内部のLiving Spaces研究との呼応するものであり、生態的文化的社会的に空間はどう生かされたかという視点に立っても有意義な研究成果であり、今後、西ベンガル研究ならびに国境を超えた東ベンガル研究の成果との協働も可能性が高いことが明らかとなった。BIN研究が必要な代表的地域研究となることは明らかである。アクションリサーチとの組み合わせなどさらに検討を続けたい。

第2報告は、島西報告であり、日本における練豆炭利用の歴史に関して、エネルギー利用の習慣・文化の頑健性が原料及び流通市場の分析から明らかにされた。利用習慣の変更が必要な練豆炭から流体化石エネルギーへの転換は日本においても一挙に起こらず、並行利用の期間があったことが統計データに基づいて示された。これは資源をエネルギー化する経路の多様性を明らかにしたものであり、神田の「エネルギー多様性社会」の概念設定に呼応するものである。本研究プロジェクトとして興味深いのは、長い年月部分暖房を維持してきた日本の特性はおそらく長く生き延びたイェ社会の歴史とも連動しているように思われ、二日目の議論でより変化の少ないLiving Spacesを考える場合の重要なヒントを得ることができた。また、歴史人口学との連動性に関しても、木材エネルギー資源の利用可能性の高い山岳部の小さな河口や谷あい形成されている村、より大きな扇状地に形成されている村あるいは海洋ネットワークの要である海岸線の村々との関係を考えると、ここでも本研究プロジェクトとの接合可能性が明確になった。

休憩を挟んだ第3報告は香川大学とのスカイプ接続による青木高明氏の報告であった。非線形物理学の専門家であり、ネットワーク・サイエンスの専門家でもある。藤原氏と共に本研究プロジェクトにおいて、数理地理モデリング・解析を行っている。今回は、同じく村山FSメンバーである中垣氏ならびに藤原氏との共同研究である北海道についての最新の成果が報告された。クリスタラーやクルーグマンのこれまでの数理地理モデリングでは、世界中であるいは日本内部でも大きく異なる地形の違いがほとんど考慮されていなかった。また、地点と地点を結ぶ道路のあり方に関する議論もほとんど無視されている。そこで、都市と道路は共進化するという仮説に基づき、地誌的データ特に標高データに基づき、移動経路の距離を計算し、さらに、湖や河川の障害なども距離を変化させる障害として組み込み、このような地誌的データを組み込んでいない場合、海岸線の影響を組み込んだ場合、標高差による傾きを組み込んだ場合で計算を行い、地図化による可視化を行った。その結果、札幌その他重要な都市形成がこれだけの単純なモデルでも明確にすることができた。もちろん、現実との差異は見出される。現実にはあまり都市発展のしていない地域での都市形成がシミュレーションされたりする。しかし、このモデルはいろいろな要素を組み込みチューニングできることにその意味がある。泥炭地域で人が入り込めないなど、より詳細な障害の可能性を入れ込むことによって、新たなシミュレーションができるからである。さらに現実のセンサスデータなどを組み込むことによって、将来予測も可能となる。都市形成が地形という変化しない基盤によってその経路を決めているとすれば、この経路依存性は、Living Spacesにおいて、変化の少ないものとして見ることもできるかもしれない。多様な生態系の種々の生命体について考えた場合、これがどのようなものか。この数理地理モデリングは、さらにクラスター分析を行う数理地理解析との連動が可能なもののように思われる。さらなる検討が大いに期待される。

全体会議の最後の報告は、村山FSの副代表である寺尾氏によるものであった。気象学者であり、4つ目の理系の報告である。BIN地域の気候データに関する報告であったが、雨量計観測の先進地としてのBINの紹介がされた。地球研で開発された研究成果でもある1951年以降のデータであるAphrodite、再解析データ、自前の研究プロジェクト、TRMM/PR（人工衛星によるレーダー観測データ）やd4pdf（大気気候モデルによるアンサンブル気候再現）などの多様なデータの長所短所の詳細が報告された。実に詳細な検討だけに、世界で最大の降雨地帯であるメガラヤを含むBIN研究の要になると同時に、国際河川の歴史地理研究との連動も期待される。Living Spacesを考える上で、雨量や風などの気象データの組み込みは、第3報告とも連動させる大きな可能性を感じさせた。しかし、村山FSのメンバーである中垣氏の決定的な問題点の指摘があった。それは、上空からの雨の観察は詳細を極めるが、地上の水文系の議論はどのようになっているのかということであった。漠然と地上は数理地理的アプローチと捉え、多くのフィールドワークや社会科学的アプローチを想定してが、もう一つのある意味で変化の少ない、あるいは、国家資本によるブルドーザー的改変がなされる地表に関する理系的分析は地元の研究機関との連携などはどうなっているのかという指摘であった。すでに地方のNGO団体であるグラム・バングラとの協働関係は確立しており、また、その代表であるカーン氏は工学博士であり土木工学の専門家でもあり、実際、カンチャンプールという研究拠点での道路建設、住宅建設の支援もされてきた。この点、理系の分野で流動性の高いLiving Spacesを囲むという視点が欠けていたことに改めて気づかされた。カーン氏の長男シャビール・カーン氏は、UCLAの出身で、まさに水文学の専門家であり、バングラデシュ工科大学の教授であり、すでに連携は確立している。この連携を含めると、本研究プロジェクトのすべての要素がBIN研究には整っていることになる。この地域研究、ダッカとタンガイルを中心に、BINの研究概要をまとめることにした。また懸案事項であるプロジェクトの表題については、現時点では、「空間をどう生かすか：比較環境史研究に基づく持続的なアクションリサーチの探求」(A network of Living Spaces. Seeking a sustainability of action researches based on a comparative environmental history.)としているが、今後の取りまとめの過程でさらに再検討を予定している。